歴教協京都大会　　第２１分科会　障がい児

「歴史を通じて生き方を考えさせる」

できるだけ身近な問題として興味づけ、自分の生き方を考えさせる試み

兵庫県歴史教育者協議会

谷　充弘
兵庫県立神戸聴覚特別支援学校

１．はじめに　学校概要

本校は、1931年に私学に続いて兵庫県立聾唖学校として、神戸市垂水区に開校した。1938年の阪神大水害、1945年の神戸空襲、そして1995年の阪神淡路大震災と、その時々に児童生徒や職員が記録したものが残っており、また、1937年、48年にヘレン・ケラー氏が来校した際の写真もあり、伝統のある学校である。

現在は、保育相談部、幼稚部、小学部、中学部、高等部本科・専攻科、高等部には普通科と専門学科としてコミュニケーションデザイン学科とがある。在籍は今年度４月で８７名（うち高等部２３名）でる。近年は、人工内耳の児童生徒が増えてきているが、小学部以上の児童生徒は、主に手話を生徒同士も授業等でもコミュニケーション手段としている。また、知的障害等の重複障害生も在籍し、個々にあった指導を教職員は心がけている。

高等部卒業後の進路は、大学・専門学校への進学、一般企業・特例子会社への就職、Ａ型・Ｂ型就労継続支援施設の利用と多岐にわたっている。聞こえない単一障害の生徒たちの多くは、進学か就職をめざしており、一定の学力が要求されており、本校では、高等学校の教科書を用いてカリキュラムを進行させている。

この報告は、一昨年度、高等部２年生でおこなった世界史授業の実践報告で、１種２級（人工内耳１名、補聴器２名）から２種６級（１名）までの聞こえの程度差がある生徒４人を同一クラスにいる。聴覚だけの単一障害だが、コミュニケーション手段は手話を基本としながらも、聞こえの程度の差異から、口話のみの生徒もいる。また、彼らの卒業後の進路希望は、進学や就職と異なっており、考えや悩みも多岐にわたっている。このレポートは、歴史学習を通じて、感じたことを表明しあい、意見交換をしながら、自分の生き方を考えさせようとした試みである。

２．世界史の授業　できるだけ身近な問題として興味づける

世界史は、高等部２年生に週４時間（４単位）の授業である。中学校での歴史の授業以来であり、歴史に興味深い生徒とそうでない生徒とが毎年在籍するのは、健聴者の高等学校と同じである。しかしながら、聴覚からの情報がないため、高等学校での説明の内容を手話で全て伝えても情報量は不足し、考えさせる時間が少なくなっている状況があった。時間を作り出そうとして、板書はプリントの穴埋めで進めてきたが、語句を記入するだけでは興味関心は薄れていった。

数年間の試行錯誤を経て、興味関心を抱かせるために、以下の三点に留意した。

①視覚教材を多用する、②体験活動を取り入れる、③身近な教材を入れる、

である。

①　視覚教材を多用する・・・見て理解が進む教材等を用意する。

例１．板書は記述形式のプリントにして、パワーポイントで記述部分を記載するか、教科書の指定箇所を記入させる。

例２．写真・映像を事業で適宜用いる。映像の音声部分は字幕を作る。

例３．等身大、実物大の写真、絵画等を用いる

②　体験活動を取り入れる・・・説明を聞くだけでなく、作業を取り入れる。

例４．石器による紙片の切断、粘土板にくさび形文字で名前を書く、等

③　身近な教材を入れる・・・ 通学途上、学校周辺、卒業生の歴史を取り入れる。

例５．五色塚古墳、卒業生（画家）が描いた空襲で焼ける本校校舎、等

特に、③を入れることで、生徒たちの日常生活の場所や卒業生たちの体験などには、強く興味を引かれ、授業へのとりくみが向上したと思っている。

３．授業のつぶやきを逃さずに討論へ

中学までの歴史授業などで多少の知識を持つ生徒もいるが、ほぼ世界史については、初めて聞く内容がほとんどである。全く興味を示さないこともあるが、ほぼ毎時間、発語が可能な３人は発語で、発語を得意としない１人も表情や手話からつぶやきを漏らしている。それを逃さずに、もう一度発言させたり、その発言をどう思うかの意見を引き出し、討論させることを心がけた。

人工内耳の１人と２種６級の生徒は、私に口話だけで伝えようとするが、必ず手話をつけてあとふたりの生徒にも発言内容が伝わるように心がけた。

発語例　アウストラロピテクスの身長・頭脳に、「小さい」　宦官に、「・・・」
ヘレン・ケラーの来校に、「うそ」　関東大震災での虐殺事件に、「う～ん」
本校から出征する教員に、「聾者は戦争になっても徴兵されないから関係ない」
原爆投下に、「広島で見たことある」　ベトナム戦争に、「ごっつい」　など

討論例　明清代は宦官に進んでなる方もいたということですが、何故だと思う？
朝鮮人と間違えられて、虐殺されたと言うことですが、何故朝鮮人を？
ベトナムの民衆の被害も大きいですが、アメリカ兵はどう思っていたのかな？

討論の際に気をつけたことが二つある。一つは、生徒たちの想像のみで意見交換をさせることではなく、教員側（谷）で、現在の歴史学で一般化している事実を提示した上で考えさせてことである。もう一つは、教員側の誘導にならないようにしたことである。

また、討論（意見交換）のあとは、可能な限り自分たちがその場にいたら、あるいは、その場におかれたら、どう行動したと思うか、どう行動すればよかったのかなどを一人ひとりに考えさせることとしたが、結論やまとめを出すことはしないこととした。

４月から始まった授業は１１月頃には１９世紀以降に入り、写真やフィルムなどの映像を示した授業が増え、生徒たちのつぶやきも意見も増え、生徒たちの意見交換も多岐にわたっていた。

４．一年間を通じて

高等部（高校）２年生であったため、進路は本人たちにもまだ漠然としており、進学か就職かを決めている程度で、明確な進路についてはほぼ未定であった。未定であるが故に、将来どのような人として成長していくかを考えてもらう時間となっていればと思ってすすめた。

生徒たちが、一年を通じて、どう変わったのかは不明であるし、進路選択にこの授業が中心的役割を果たしたとは考えていない。ただ、社会科は暗記すればよい教科という認識は多少払拭できたとは思っている。

生徒たちから、こうすれば良いのでは、と授業の方法について意見を頂くこともあり、授業改善に繋げられることとなっている。授業計画は４月から多少のずれや変更はあるものの、授業方法（教材の提示や板書など）には、生徒たちの意見を多く採り入れており、年度初めと年度末では、かなり形態も異なってきたが、生徒たちの進言には感謝している。